

仲間がいれば輝ける！

－心の病と共に生きる仲間達連合会キララ（岩手県一関市）活動紹介－



「俺たち、み～んな障がい者、正真正銘。手帳付き。俺は２級。統合失調症歴もうすぐ４０年」
「私は１級。同じく統合失調症歴、４０年」「私は３級。統合失調症歴は８年、まだまだですね」
——。２００９年１月に開かれた「心の病と共に生きる仲間達連合会キララ」による劇団「キラりん一座」の盛岡公演（盛岡ハートネット主催）。当事者会を見学に来たリュウタの母親に、メンバーが明るく自己紹介するシーンだ。

演劇「心、天気になあれ！part2」の主人公リュウタは統合失調症。何度か仕事に就くが長続きせず、調子を崩してしまうが、保健師のすすめで当事者会に参加し、自信と希望を取り戻し始める。一方、それ以来、熱心に仕事探しをしなくなったリュウタの将来に不安を抱いた母親。

「当事者会に行ったって、ただ話っこするだけでしょ」と冷淡だったが、活動の様子を見学に行ってみた。そこで目にしたのは、自らをオープンにし、障害があっても助け合って生きる仲間たちの姿だった。

「みんな障がい者だけど、助け合って会を進めるんですよ」「みんなといるとさ、なんかさ、少しずつ変わってこれたと思う。自分が役に立っているような気がしてきたっていうのかな」と晴れやかに語るメンバー。

母親は、リュウタの回復に当事者会が大きな役割を果たしていることを実感する。曇っていた心に、少しずつ晴れ間が見えてくる…。

心の不調や悩みを天気に例え、回復を信じ、自分なりの生き方を見つけてやっていこうというメッセージ。盛岡公演には県内各地から約１００人が来場し、賞賛の声が相次いだ。

手の届く存在

キラりん一座の演劇が、なぜ、これほどまで観る者に力を与えてくれるのか。

それは、「仲間の力」であろう。「わかち合える仲間がいれば、晴れ間が見えてくる。みんなの心、天気になあれ！」。

そして、言葉の力でもであろう。ここには、大言壮語も机上の理念もない。あくまで実感に根ざしたわかりやすいセリフに大切なメッセージが落とし込まれているからこそ、確かに伝わるのだ。なぜ、こんなに共感を呼ぶのか。

メンバーが演劇をやらされているのではなく、自ら、共に、楽しんで演じていることが伝わるからであろう。

そして、観る者にとって演技手がかけ離れた存在ではなく、手の届く存在だからでもであろう。

舞台に立っているのは、ずば抜けて演技力に秀でた人たちではない。

あくまで普通、日常の延長なのに、この人たちは輝いている。

そう、あなたもできる。あなたも輝けるのだ。

脚本担当は保健師の北川明子さん。

優れた書き手というより、優れた聴き手と言った方がふさわしい。

なぜなら、セリフの一言一言は「メンバーの声、心の声」。

たとえば「俺たち、み～んな障がい者、正真正銘。手帳付き」とのセリフもフィクションではなく、定例会でのやりとりそのものだ。

定例会は月1回、一関市千厩の「酒のくら交流施設」の一角で開催。初めて参加した当事者がいれば、メンバーは口々に自己紹介し、打ち解け合い、仲間として迎え入れていく。

こうしたキララの日常的な活動や、メンバー一人ひとりの悩み、苦しみ、仲間と共にある喜びが脚本に盛り込まれ、リハーサルを積み重ねる過程でメンバー自身が自分の役割に気づき、作品として高められ、観る者に力を与え、共感を呼び、それが演じるメンバーの喜びとなる…。

この一連のプロセスすべてが、キララをかたちづくる。



シンポ契機に

さて、キララが活動する一関市は岩手県の南端。2005年に旧一関市と東磐井郡などの7市町村が合併し誕生した新市で、面積1133平方キロメートルと岩手県の中で最も広い。

東磐井郡は山あいの広い範囲に集落が点在する土地柄で、かつてキララの活動拠点だった一関保健所大東支所は同郡内の大東町、現在の活動拠点である「酒のくら交流施設」は隣町の千厩町。

今なお「一関のキララ」というより、「東磐井のキララ」と言った方がしっくりくる。

キララの歴史は2003年春、北川明子さんが東磐井郡をエリアとする一関保健所大東支所へ赴任したことに始まる。

同年12月、大東支所が初めて精神保健シンポジウムを開催し、当事者が運営に携わり、受け付けや司会なども担った。

シンポが大成功だったことで自信を付けた当事者が支所に集い語り合う中で、当事者会結成の機運が高まっていく。

一人ひとりが役割を担うレクリエーション、SST（社会生活技能訓練）など「知識と仲間とよい経験」を得るためのさまざまなプログラムに取り組みながら、準備会を重ねて名称、会則、活動内容などを決めていった。

2004年9月、いよいよキララが発足し、「明るく生きる精神保健シンポジウム」を主催。

以来、月1回の定例会をベースに、年1回シンポジウムを開催。

2006年には演劇を通じ心の病への理解を訴える当事者主体の劇団「キラりん一座」を旗揚げした。

このほか、体験&詩集によるメッセージ「心の病と共に生きる！」刊行、大原水かけ祭りなど地域の行事への参加、当事者を講師に心の病について学ぶ「キラりん講座」開催…などなど、キララは会員約30人の小さなグループでありながら、活動の幅広さとクオリティーにおいて、岩手で最も輝いている。

今年1月には県央部にある紫波町の当事者会「さくら会」が寸劇を発表するなど、キララに元気をもらった各地の当事者の取り組みも芽生えつつある。



地域と仲間とそんなキララには、これまで2度の大きな危機があった。最初の危機は2008年春、一関保健所大東支所の閉鎖だった。

活動拠点がなくなってしまう…。閉鎖方針を受け、キララは一関保健所に「閉鎖後の当事者活動への支援継続」を要望。

今後の活動についてメンバー同士で話し合いを重ねたが、なかなか展望は開けなかった。

そんなとき、キララの支援に名乗りを上げたのは「地域」だった。

精神保健福祉に縁もゆかりもなかった、一関市千厩の第三セクター千厩まちづくり株式会社が、同社が管理運営する「酒のくら交流施設」の事務所の一室をキララに提供。大東支所から大正ロマン漂う瀟洒な建物群の一角に、キララは引っ越した。

ここに、キララは変容を遂げた。活動拠点の移行により、本当の意味での「地域」へ。

また、行政に対しては「支援」を求めず、「連携」を求めることに。

さらに、大東支所を拠点とした当事者会と、それを支える家族・支援者・ボランティアという関係性も、それぞれの立場を超えた「仲間」へ。

危機を力に、キララは地域に根ざし、当事者を主体としながらも「仲間」と共にある、文字通り「心の病と共に生きる仲間達」となった。



佐藤代表の死

2度目の危機は、キララ代表の佐藤正広さんの死だった。

何度も自殺未遂を繰り返し、北川さんとの出会いを機に立ち直り、キララを牽引してきた佐藤さんを病魔が襲った。

「前は死にたがってたのに、白血病と告げられた今は生きたいと思う。おかしいですよね…」。
飄々とした口ぶり。だが、病状はどんどん悪化していった。

2009年7月、キララは酒のくら交流施設を会場に「キラりん一座 in 千厩」を開催。新たな活動拠点で初の演劇公演であり、また、佐藤さんの最後の舞台となった。

医療機関の協力の下、入院先の盛岡市内の病院から100キロ以上離れた千厩へ、佐藤さんはやっ

て来た。そして、力を振り絞って舞台に立った。

公演終了後、病院へとんぼ返りした佐藤さん。

キララの次なる企画は10月17日、同所での「明るく生きる精神保健シンポジウム」。

そこで上演する「トンネル抜けたら！Part2」への出演を期していた佐藤さんだったが、2週間前の3日、48歳の生涯を終えた。「ありがとう」という言葉を残して。

シンポジウム当日。メンバーは涙をこらえ、舞台に上がった。

脚本は大幅に書き換えられていた。

アパートの一室を舞台に、そこに集う仲間たち。

口々に語られる佐藤さんの思い出。

その死に向き合い、支え合い、明るく生きようと誓うメンバーたち。傍らには佐藤さんの遺影。

終演後、こらえていた涙があふれた。

佐藤さんの死に打ちひしがれ、乗り越えられぬ痛みを感じつつも、その死に正面から向き合ったキララ。

演劇を通じ、佐藤さんの生きざまは、観る者の心に刻まれた。

精神障害者はストレスに弱いとされる。

でも、なぜキララはこんなに強いのか。

その源こそが、「仲間の力」なのだと思う。



とことん地道

さて、リリー賞は「精神障害を持つ人（団体）」を対象としているが、キララの「伴走者」である北川さんについて触れないわけにはいかない。

べてるの家（北海道浦河町）について、ソーシャルワーカー向谷地生良さんの存在抜きには語れないのと同様に。

以前、北川さんに保健師としての信条を聞いたことがある。

「一人ひとりとしっかり関わること。一人が救われて、その人がまた別の人を救って…。その積

み重ねでしかないと思うの」。

一人ひとりの力を信じ、一人ひとりのペースに合わせながらの伴走。そんな、とことん地道な日々の積み重ねが、既存の精神保健福祉の枠組みを超えた「心の病と共にある仲間達」の輝きを生み出す契機となった。

北川さんは現在、盛岡市の岩手県精神保健福祉センターに勤務している。

だが、伴走は続く。なぜそこまで頑張れるのか。

彼女は笑顔で答えてくれた。「だって、キララが私を支えてくれるもん！」

キララはこれからも、当事者のみならず多くの人々に「仲間と共にある喜び」を伝えつつ、自分たちが楽しむことも忘れずに、マイペースで歩み続けることだろう。

そして、そんな歩みの先にこそ、日常性に根ざした真の「共生社会」が広がっていることだろう。

故・佐藤正広さんの言葉で締めくくりたい。

「一人ひとり力は違っていても、ちゃんと努力すれば、本当の喜びがでてくるよね。何事も障がいにならず、自分で努力してこそ、一步一步前進するんだよね。自分がかげないように仲間と一緒に努力していくよ！」

2010/04/12

黒田大介：岩手日報学芸部記者。精神障害当事者・家族・関係機関・市民のネットワーク「盛岡ハートネット」事務局（ブログ「Open, to Love」 <http://opentolove.exblog.jp/>）。岩手県盛岡市在住。